

第2回 日本ジオパーク委員会議事録

日時: 2008年9月4日(木) 13:30~17:10

場所: 経済産業省・別館10階 1020号会議室

出席者: (敬称略)

委員長

尾池和夫 京都大学 総長

副委員長

町田 洋 日本第四紀学会(東京都立大学名誉教授)

委員(五十音順)

伊藤和明 NPO法人 防災情報機構 会長(元NHK解説員)

加藤碩一 産業技術総合研究所地質調査総合センター 代表

小泉武栄 東京学芸大学 教授

鹿野久男 (財)国立公園協会 理事長

瀬古一郎 (社)全国地質調査業協会連合会 会長

高木秀雄 日本地質学会(早稲田大学教授)

中川和之 日本地震学会(時事通信)

中田節也 日本火山学会(東京大学地震研究所教授)

松本 淳 日本地理学会(首都大学東京教授)

オブザーバ

外務省広報文化交流部国際文化協力室 室長

安東義雄

外務省広報文化交流部国際文化協力室 課長補佐

渡邊 博

外務省広報文化交流部国際文化協力室 事務官

古川忠雄

外務省広報文化交流部国際文化協力室 事務官

濱田 幸

文部科学省国際統括官付 国際統括官補佐

秋山和男

文部科学省国際統括官付 ユネスコ第3係長

日俣詠里子

文化庁文化財部記念物課 主任文化財調査官

桂 雄三

文化庁文化財部記念物課 企画調整係員

石田恵実子

農林水産省農村振興局農村政策部農村環境課課長補佐

長田実也

林野庁森林整備部研究・保全課 環境保全専門官

小酒井淑乃

林野庁国有林野部経営企画課 環境保護企画係長

本多 融

林野庁国有林野部経営企画課 森林施業調整官

善行 宏

経済産業省知的基盤課 課長

渡邊重信

経済産業省知的基盤課 課長補佐

永田邦博

国土交通省総合政策局観光資源課 企画係長

松岡 良

環境省自然環境局国立公園課 計画第1係長

中山直樹

事務局

事務局長 産業技術総合研究所

佃 栄吉

副事務局長 産業技術総合研究所

脇田浩二

産業技術総合研究所

渡辺真人

産業技術総合研究所

牧野雅彦

産業技術総合研究所
産業技術総合研究所
産業技術総合研究所

飯村一清
吉川敏之
原 英俊

世界ジオパーク候補申請地域

洞爺湖・有珠山 4名

洞爺湖周辺地域エコミュージアム推進協議会 山中 漠、岡田 弘、本田康隆、木村尚司

糸魚川 2名

糸魚川市 岩崎良之、フォッサマグナ・ミュージアム竹之内耕

山陰海岸 3名

山陰海岸ジオパーク推進協議会 馬場雅人、谷本 勇、岡坂浩一

四国(室戸地域) 3名

室戸ジオパーク推進協議会 川崎高思、近藤英文、植田壮一郎

島原半島 3名

島原半島ジオパーク推進連絡協議会 杉本伸一、牛場雅巳、松島 健

プレス 4名

朝日新聞、共同通信、神戸新聞、日本海新聞

[はじめに]

事務局(脇田)から各委員の紹介と、資料確認(委員会配付資料、日本ジオパーク申請書類、地域からの配付資料からなる)、写真撮影の了解等の連絡を行った。

1. 委員長挨拶

尾池委員長より、9/2に松浦ユネスコ事務局長と会見する機会があり、日本ジオパーク委員会を代表して挨拶したことが報告された。また、その席で「今年は日本から 2~3 地域申請予定」と紹介したことが伝えられた。

[報告]

1. 第 1 回日本ジオパーク委員会議事録確認

事務局(渡辺)から「第 1 回日本ジオパーク委員会議事録(資料 1)」の説明があり、本委員会中に意見がなければ承認とすることになった。

委員会終了までに特段の意見はなく、承認された。

2. 日本ジオパーク候補地域の申請状況

事務局(渡辺)から、アポイ岳、南アルプスから日本ジオパーク候補地域の申請があったことが紹介された。

[プレゼンテーション]

1. 世界ジオパーク候補地域からのプレゼンテーション

世界ジオパーク候補の各地域から、発表 10 分、質疑 10 分でプレゼンテーションが行われた。発表順は事前の抽選により、1)糸魚川、2)島原半島、3)四国(室戸地域)、4)山陰海岸、5)洞爺湖有珠山となった。

1)糸魚川

a. 概要

- ・ 科学的特徴として、地質・地形・動植物・文化に多様性があり、複数のジオサイトをまとめて地域ジオパークと呼んでいる。
- ・ 運営組織には、糸魚川ジオパーク運営協議会と糸魚川ジオパーク推進市民の会がある。
- ・ 地域振興・経済開発として、バスツアーを実施したり、商品開発を行っている。
- ・ 教育活動としては遊歩道整備・リーフレット・解説板制作、修学旅行の積極的な受け入れ、博物館(出版活動も含む)、ツアーガイド養成講座などがある。
- ・ 保護活動は自然公園や記念物の制度に基づいて行っている。
- ・ 特記事項として、20 年来の地質遺産に基づく活動、シンポジウム、防災教育が挙げられ、「ジオにいざなう扉」(例えば日本酒も)が数多くある。

b. 質疑

- ・ 大学研究者との協力は、近隣大学・国立科学博物館等と協力している。
- ・ 火山・砂防面での観光客の安全面への備えは、危険のある場所では許可制とし、ガイドをつける。
- ・ 書店で売れるようなまとまったガイドブックは、制作を検討したい。
- ・ 採取者(盗掘等)への対応としては、史跡 2 地域は法令で、ひすいは河川法で保護。ただ

し、法律に頼るばかりではなく地域ぐるみの対応も始まっている。

- ・ 整備は基本的には今ある施設を活用しつつ、新たな予算もつぎ込む。
- ・ 多国語化の取り組みは、まず英語から始め、その後広げてゆく。
- ・ 焼山では今年 10 月に「火山砂防フォーラム」があり、これに合わせて地元の聞き取り等の学習を進めている。
- ・ 塩の道は、糸静線に沿ってできているという地質との関わりがある。
- ・ ジオパークの市場価値については、世界遺産等は参考になるかも知れないが読みづらい。

c. 委員からの意見

- ・ ジオパークの中に地域ジオパークというのはわかりにくい。ツーリズムコース等の呼び方にしてはどうか。
- ・ ひすいをもっとアピールしてもよいのでは。

2) 島原半島

a. 概要

- ・ テクトニクスの面からみて、活断層・活火山を伴う変動帯の代表である。
- ・ ジオサイト・ジオポイントは、活断層・活火山を中心に数多くある。
- ・ 記録に残る 1990-1995 年の雲仙火山活動は、その後の防災に寄与している。
- ・ 火山との共生活動として、災害を学ぶ講座、COV(Cities On Volcanoes)等を行ってきた。特に COV は、市民ボランティアの実績など、今回のジオパーク申請のベースともなった。
- ・ 災害を後世に伝える取り組みは、オスナブリュック宣言ジオハザード重視にも沿う。
- ・ ジオツアーの中核となるのはビジターセンターで、パークボランティア、有料ガイド、災害語り部など、人の養成も進んでいる。
- ・ 雲仙岳では科学掘削プロジェクトも行われ、IAVCEI の Decade volcano (世界で 16) に指定されている。
- ・ 水・温泉、山海の幸など、火山・大地の恵みも豊富。歴史的・文化的サイトも豊富で、四季折々の魅力がある。

b. 質疑

- ・ 大陸地域からの観光客は火山に不慣れなことが予想されるが、噴火予知も進歩してきており、防災マップの整備をよりいっそう進めることでリスク管理していく。
- ・ ジオ関連商品には、既に噴火まんじゅう、石を使ったペン立てなどがある。新商品開発は、商工会議所に依頼しているところ。さらに詰めていく予定。
- ・ ジオの楽しさを伝えるために、記念館のリニューアル、県立自然公園等のビジターセンターの活用、ジオツアー等を計画している。
- ・ 90 年代の噴火以降、語り部養成として取り組んできた人材育成を、ジオパークガイド養成として継続したい。地質専門家も島原市で募集予定。
- ・ 火砕流堆積物は、ある部分はそのままの状態でも保護するが、実際に削ってもらえる場所も設定し、専門ガイドをつける。
- ・ 植生、ジオエコツアーについても、どういう風にして自然が回復するか観察できるエリアがあり、対応可能。
- ・ 復興のために、土地の 6 m かさ上げ事業も行った。火山会議でも官民学連携の評価が高い。自治体と住民の協力がうまくいっている例。

- ・ ジオサイトは雲仙岳と半島東側に多いが、断層等、西側についても魅力あるジオはある。

c. 委員からの意見

- ・ 災害対策は国・地方自治体の取り組みがまずあるはず。その上で地域のネットワークを説明するように。→島原半島に限らず、各申請地域についても同様
- ・ 災害からの復旧に話題が集まりやすいが、ジオの恵みをどのように PR していくか要検討。

3)四国(室戸地域)

a. 概要

- ・ 国土交通省、および経産省・文科省・環境省からの予算を獲得しており、他地域とはやや違う立場かも知れない。その分、失敗は許されないという意識がある。
- ・ 持続可能な地域をどう作っていくかへの挑戦。
- ・ 四国ジオパークとして、室戸の他に仁淀などいくつかの地域を予定している。
- ・ プランニング、ビジネス+地域住民の行動力が地域活性化の基本的な仕組み。
- ・ 経済波及効果、公益機能の最大化のためにジオパーク活動の盛り上がりを活用したい。
- ・ 四国には海岸、川、山の多様な地域資源があり、ジオというキーワードで各地域の連携が期待される。
- ・ 体制は NPO の GUPI 四国が中心。
- ・ 今年度の進捗として、6 月に推進協議会を設立した。ジオ関連商品の付加体ケーキを考案中。県の予算も獲得予定。
- ・ 四国ジオパークの課題は、元ユネスコ地球科学部長の Eder 氏などからアドバイスを受けている。

b. 質疑

- ・ 現状外国人観光客が少ないことは認識しており、県の中に観光部を創設した。韓国とは具体的な交流も始まっている。ラフティングには豪州人 5000 人が集まる(ただし今回の域外)。情報発信に工夫をしたい。外国とのネットワーク作りも始める。
- ・ 四国ジオパークとしての将来ビジョンは、これから高知以外の他県を訪問して作業する。予算は四国全体を想定している。道州制になれば四国は一つになるはずであり、議員団も結成されている。
- ・ 看板の整備が遅れているが、この 9 月に予算要求を予定している。
- ・ 南海地震への安全面での対応・対策を進め、防災も目玉として売り込みたい。地震が目に見える(隆起海岸線など)というのも高知ジオの魅力といえる。

c. 委員からの意見

- ・ 付加体を中心に据えると「四国」という広さでは無理。芸西海岸等がないのも不満。
- ・ 日本の 7-8 割は付加体。日本に付加体のジオパークはあってよいが、準備不足。ジオサイトをわかりやすく PR する必要がある。

4)山陰海岸

a. 概要

- ・ 地形と地質の多様性(例:鳥取砂丘、鎧ノ袖、玄武洞)がある。
- ・ 山陰海岸ジオパーク構想では、自然・環境保全、研究・教育、ジオツーリズム、地場産業

振興の4つの柱を基本に据えている。

- ・ 自然・環境保全では鳥取砂丘条例、日常のパトロール、コウノトリの取り組みなどの具体例がある。
- ・ 研究・教育では鳴き砂文化館、博物館等既存の教育施設を活用し、体験学習会も始めている。ご当地検定や津波対策にも取り組む予定。
- ・ ジオツーリズム関係では、11月を目処に看板を整備する。各所にある温泉などを活用する。
- ・ 地場産業振興は、鳥取砂丘等の地質にあわせた農産特産品などが挙げられる。
- ・ 山陰海岸ジオパーク推進協議会が中心組織であり、NPO法人設立を準備中。

b. 質疑

- ・ エリアは基本的には山陰海岸国立公園に基づいている。西は鳥取砂丘西端まで。東は地盤隆起地域まで。組織的な理由(構築が難しい)もある。
- ・ 地震、水害などの防災教育・復興史は地域ごとに事例・取り組みがある。地域で温泉の無料開放を実施した例もある。
- ・ 湿地帯を守ることは環境保全ともつながるので積極的に行う。
- ・ 全体としてとても広いエリアになるが、内陸部はエコミュージアム、海岸部はジオツーリズムを中心としたプランを考えている。
- ・ 大山、隠岐の島、氷ノ山など、魅力あるジオが周辺にあるが、既に大がかりな組織であるため、今回は含めなかった。将来的には考慮の余地もある。

c. 委員からの意見

- ・ 諸活動が従来型の印象がある。ジオとの結びつき、ジオ化の具体的な構想が必要。
- ・ 地図上にジオサイトの説明がほしい(現状ではポイントしかない)。
- ・ 日本海形成だけではストーリーとして地域を束ねるのは難しいのでは。

5) 洞爺湖有珠山

a. 概要

- ・ 2000年噴火での犠牲者ゼロは、教育プログラムの賜であったと考えている。その継続と発信のためにジオパークを活用したい。
- ・ 変動する大地と人間の共生と、持続可能な地域作りが特徴。
- ・ 今年のサミットも含め、海外との交流も実績がある。
- ・ 世界ジオパークとしての有珠山は、変動帯・島弧活火山のジオパークである。地球が変わること、すなわち変動が身近にある。
- ・ 有珠山とともに生きることをテーマに、ヒューマンネットワークを構築してきた。次世代への継承も続けたい。
- ・ 豊かな森と湖もあり、屈指の観光地となっている。
- ・ 住民・行政共同の活動・取り組みの実績がある。
- ・ 20世紀に4回の噴火を経験しており、経過時間の異なる地形・生態系の変化(回復)が観察できる。
- ・ ジオサイトとして被災した病院・道路、三松記念館などがあり、ジオツアーも行っている。観光インフラも整備されている。
- ・ このほか、地元住民によるガイド、こども郷土史講座、火山マイスター制度、DVD制作などを進めている。

- ・ 地域住民・行政・学識経験者との活動を継続したい。

b. 質疑

- ・ 外国人観光客は既に少なくない。サミットは国のプログラムのため、正式なジオパークPRイベントはなかったが、プレスツアーは行った。地元イベント(30 日前)として札幌ジオツアーも行った。
- ・ 火山と人間との共生は、危険の裏返しでもあるが、エコミュージアムのきっかけでもある。有効な対策は長期的課題として考えていきたい。
- ・ 現状が高度成長期のツーリズムの上でできている観光地であり、ジオパーク認定を契機に地元の認識の変化を期待したい。
- ・ 火山活動と人のドラマはたくさんある(アイヌの火砕流災害・住居移転なども含む)。火山地質・物理学者の協業が実現してきた。次世代の育成にも力を入れ始めている。
- ・ 周辺部に有珠山以外にもジオサイトとして魅力的な場所はあるが、広げるときりがなく、エリア選定は悩ましい。洞爺湖の火砕流台地でひとくくりとした。ジオパークで問われる管理能力との兼ね合いもある。
- ・ 申請書とプレゼンのエリアが違うが、申請書が正しい。
- ・ 有珠山周辺の自治体間で、温度(熱意)差を埋めるのは課題。噴火については学問的にかんがりのことはわかり、住民も知った。共同で行動できるようになった。格差は依然あるが、公共建築物はレッドゾーンから外すなど実績も上がっている。ジオパーク活動を進めながら解決する。

[休憩] (3:45~3:55)

休憩の間に、地域からの出席者およびプレス関係者は退席となった。また、委員の評価シート採点が集計された。

[審議]

1. 審査基準の確認と倫理申し合わせ

今回審査に利用した評価シートの点数の重み付けに対して、魅力的なジオサイトを重視してはどうかとの意見があり、検討課題とすることになった。

評価・視察に際しての倫理申し合わせに関して、事務局から国家公務員倫理規定に準ずることが提案された。議論の結果、国家公務員倫理規定の第三条 1~3 項の倫理行動規準の考え方を参考に、それぞれの委員が適切な行動を取ることを申し合わせた。

2. 申請書およびプレゼンテーションの審査

最初に、事前に各委員から出されていた仮採点票から抜粋したコメントが紹介されたが、特に意見は出されなかった。続いて、各委員の採点集計結果が公表され、これを受けて次のような議論が交わされた。

3位と4位の間で有意な差があると思われ、審査結果はほぼ固まったと判断できる。この時点で、トップ3には英語の用意を早めにさせる配慮も必要ではないかとの意見が出された。これに対し、5 地域すべてに英語の用意をさせてはどうかという意見と、日本語(の申請内容)の書き直しが必要という意見があった。今回の各申請地域は互いの申請書を見ていないので、どんな書き方をするかはアドバイスが必要との合意がなされ、早めに(次回委員会の決定を待たずに)連絡する方向でコメント案をまとめることになった。アドバイス案は委員がメールで持ち寄り、事務局でとりまとめることになった。

また、世界ジオパーク申請に関してスケジュール確認が行われた。英語での申請書は今年中に GGN に提出することになるので、11 月末頃までに英語の一次原稿ができていない必要がある。このため、できるだけ早く英語化の作業を始める必要がある。また、GGN 側の体制の問題で、来年の申請は今年の 3 地域の申請審査が終わるまで出せないらしい。ただし、3 地域すべてかどうかは不明。

3. 現地視察について

事務局から各委員の都合を調整した現地視察の案が提示された。議論の結果、委員会として希望する視察の日程とメンバーを以下のようにすることとし、各地域の都合を打診・相談することになった。また、視察のポイントも事務局で提案することになった。

有珠: 9/30-10/1、伊藤・中田

糸魚川: 9/30-10/1、加藤・鹿野

山陰: 10/5-6、尾池・高木

高知: 10/7-8、尾池・中川

島原: 9/23-24、伊藤・小泉・町田

今日の審査結果を視察前に知らせるべきかどうかは議論になった。候補に選ばれなかった地域が、結果を知って視察に消極的になってしまうことを心配する意見もあったが、4 位が来年の 1 位とは限らないので早めにアドバイスもした方がよい、また視察を通じて強くアドバイスをするためには結果を知ってもらった方がよいということになり、事務局で通知の文書を作成することになった。また、4、5 位のところにはできれば人数もかけて十分にアドバイスをした方がよいとの意見があり、費用の問題を検討することになった。

4. 日本ジオパークの審査の目安について

事務局(渡辺)より、世界ジオパークと日本ジオパークの審査基準の違いについて、最低ラインをどうするかとの問題提起がなされた。日本ジオパークになる理由として、発展途上である場合、規模が小さい場合が想定され、いずれも継続的に活動できるかが重要と思われるとのコメントもなされた。

前回の議論で、「世界の予備軍を日本とはしない」としたこともあり、世界ジオパーク推薦地域は自動的に日本ジオパークとするものの、世界ジオパーク落選地域は日本ジオパークとして再審査する方針が確認された。そして、防災など、日本基準として優先すべきポイントがあってもよいのではとの意見があり、新たに申請されたアポイ岳・南アルプスも含めて申請書を見直して、議論を続けることになった。基準については、将来は GGN にも修正・変更を求めることも検討することも確認された。

なお、来年の日本ジオパーク申請受付については、今年よりは前倒しで始めたいとの案が事務局より出された。これに対し、期限を設けずに随時受け付けてはどうかとの意見もあったが、事務局からは委員会開催の都合から難しいのではと回答した。

[その他]

1. 日本ジオパーク認証式

加藤委員より、日本ジオパーク認証式をやりたいとの案が出され、特に異論はなかった。開催日時は 2 月半ばの金曜日(20 日が候補)、場所は東京都内のホールを中心に検討することになった。メディアへの対応はどうか議論され、委員会として中立性は維持した方がよいとの判断から、特定のメディアに負わない(後援等を依頼しない)方向が確認された。

2. ロゴマークについて

ジオパークのロゴは、GUPI が募集しているが、ほとんど知られていない。委員に募集の情報を流してほしいとの要望があった。

3. 次回以降の予定確認

次回の委員会は 10 月 20 日午後の開催とし、時間と場所は後日事務局より案内することで内定した。

以上

[配布資料]

資料 1 第 1 回日本ジオパーク委員会議事録 (案)

資料 2 日本ジオパーク候補申請地域一覧

資料 3 審査に関わる倫理に関する申し合わせ

資料 4 評価シート

資料 5 現地視察 (案)